

天童寺世代考(四)

吉 田 道 興

晦巖大光(仏光) Ⅱ 東谷妙光

天童寺の寺史関係の史料には、「晦岩^(大光)光禪師」(『扶桑五山記』巻一、天童住持^(天童)次位)、「晦巖(仏)光禪師」(『寺志』巻三、先覚攷)、「晦巖光禪師」(『統志』巻上、先覚)とあって、晦巖が天童寺に住したことに間違いはないと思われる。問題なのは、晦巖の確固たる伝記史料がないことである。

『寺志』『統志』は「晦巖光」と「東谷光」とを同人と見做す立場から論述している。すなわち「晦巖光禪師」の項の下に「師諱仏光晩号東谷嗣華藏祚」(『寺志』)や「増集統伝灯録云、師常之無錫人(以下略)」(『統志』)の記事

天童寺世代考(四)(吉田)

がそれであり、『増集統伝灯録』巻六の「東谷光」伝そのままを引用し論を展開している訳である。「東谷光」に関する史料は、後に掲げる如く多数ある。しかし、それらの史料のいずれも「東谷光」の天童寺入院の記載はない。つまり『寺志』『統志』を除き他には見当らないのである。従って簡単に両者を同人と見做すには、それを証する史料がない上において首肯しがたい面を有するのである。

もし、『寺志』と『統志』との記事を信用するとすれば、「東谷光」を天童寺の住持と認めることを前提とせざるを得ない訳である。

以下は、その「東谷光」の史料に基づいて論述してみることにしたい。

比較的初期のまとまった彼の伝記史料は、『増集続伝灯録』卷六所収の「杭州靈隱東谷光禪師」伝である。これに拠ると東谷は「大鑑下十七世、華藏明極祚禪師法嗣」とある如く、曹洞宗宏智派下に属し、自得慧暉―明極慧祚と承ける禪者であり、如浄禪師とほぼ同時代に活躍した後輩といえる。

彼は「常之無錫人」とあるので、その出身は、現在の江蘇省の南部、太湖の北側に位置する無錫の町に該当する。

宋代、この地は「常州」両浙路に属していたという。友人として「侍読」の尤熿(字、伯晦。『宋史』三八九、『万柳溪辺旧話』、『南宋館閣続録』等に出づ)と厚い善しみを交したという。尤熿は、祖父尤袤・父尤槩と続く高級官僚の家柄であり、彼自身「礼部尚書」「翰林学士」になっている。ちなみに「尤」姓の常州人が多数いることから二人は出身地を同じくする幼な馴染みの可能性が大きい。

東谷の両親や姓名は不明である。出家の年齢、受業師、修行地や修行内容など、いずれも記載がなく不明といわざるを得ない。

初住地は「嘉禾本覚(寺)」という。嘉禾は、現在の湖

南省南部の桂陽県の西南約70kmの地にある町で、本覚(寺)はその一角にあった。本覚寺の創建年時は、不詳であるが『両浙金石志』卷二所収の「唐本覚寺経幢」の文によれば、既に唐代咸通十年(八六九)三月に「仏頂尊勝陀羅尼経幢」が建立されていることが知られ、藏廩院主・行琛維那・従泰典座・弘信などの僧名が記されている。南宋代当時における本覚寺の様子は、よく判らない。東谷が本覚寺に入院した時期も在住期間も不明である。

その後、「蘇之靈巖(寺)」、次に「常州華藏(寺)」へと遷っている。江蘇省蘇州の靈巖山(一名石鼓山・硯山・硯石山・石城山)山頂の靈巖寺は、太湖の東側に位置し、その昔、呉王が離宮の「館娃宮」を置いた跡に建立され、旧くは「秀峰院」「秀峰寺」と称された名刹である。「常州華藏(寺)」は、前述した通り東谷の出身地「無錫」の町にあって、正式に「褒忠顕報華藏寺」(一名顕報寺)と称し、『圓悟克勤(一〇六三―一一三五)の法嗣密印安民(不詳)の中興した名刹で後に甲刹の一に列せられている。東谷の本師明極慧祚(不詳)も住している。恐らく東谷は華藏寺において明極の鉗鎚を受けたであろう。懐しの寺院へ還っ

てきた感慨を抱いたに違いない。この本覺寺と靈巖寺の入院時期と在住期間も不明であるが、比較的短期間であったと思われる。

その後、「中興万寿(寺)」、すなわち蘇州府城内の「万寿(寺)」(旧名浄寿院・安国寺・長寿寺・安国長寿院。当時の正式名「承天万寿禅院」、後に崇寧万寿寺・天寧万寿寺・報恩光孝寺などと称す)に住し、他の寺院に比べ在住期間が最も長かった(「居之最久」という。この万寿寺は、十刹(寧宗の頃に設立)中の第四位という名刹である。この万寿寺において七百人もの会衆が満ち溢れ、東谷が彼等を接化したという。なお、この万寿寺の入院や在住の時期も不明である。

万寿寺における東谷の道譽が振興したのか次に勅命によって五山の「明之育王(寺)」に住している。浙江省明州慶元府の阿育王山広利禅寺(旧名広利寺・阿育王寺・広利禅寺。後に育王寺と称す)は、五山の第五位である。東谷は、この育王寺に住している頃まで、まだ「晦巖」と号していたのであろうか。冒頭に触れたが、晦巖大光・晦巖仏光ないし、東谷光とその名の表記は異なるものゝ、いずれ

天童寺世代考四(吉田)

も同人と見做すことが正しいとすれば、彼の育王寺在住期に道元禅師が入宋し、相見していることが『正法眼蔵仏性』と『宝慶記』との記事によって知られる。ただし「大光和尚」「育王山長老光」という名、つまり「晦巖大光」の名による記事であって「東谷妙光」の名ではないことを確認しておく。

まず『眼蔵』仏性卷の記事によれば、道元禅師が初めて「阿育王山広利禅寺」を訪ねたのは、嘉定十六年(一二二二)秋の頃であったという。この時、大光が住持であったか、また相見したかは、記事に全く不明である。同書は、再訪の際、宝慶元年(一二二五)夏安居中に道元禅師が既に見ていた西廊の壁間に描かれていた「西天東地三十三祖の変相」図に関し、西蜀出身の成桂知客に質問してみたが埒があかないので、堂頭に問うてみようという成桂はそれとなく制したので止めたとの旨を述べている。「ときに堂頭は大光和尚なり」とあるので、右の質問はしなかったが、この時に相見し、別の質問をした可能性がある。『宝慶記』の記事は、それを推定せしめるものである。

それは、道元禅師が如浄禅師に種々の質疑を呈し、教示

を得る問答の一つに登場する。次にそれを掲げておこう。

拜問、先日謁_ニ育王山長老_ニ大光_ニ之時、聯難問次、大光曰、仏祖道与_ニ教家談、水火也、天地懸隔。若同_ニ教家之所談_ニ者、永非_ニ祖師之家風。今大光道、是耶、非耶。堂頭（如浄）慈誨曰、唯非_ニ大光一人有_ニ妄談、諸方長老皆亦如_レ是。諸方長老、豈明_ニ教家之是非_ニ耶、那知_ニ祖師之堂奥_ニ耶、只是胡乱作来長老而已。

「先日」の年月日は、不明ながら恐らく前述の宝慶元年夏安居中の再訪時と思われる。育王山住持大光の言として「仏祖の道」（禅家の言か）と教家の談とは、水火の如く懸隔していて、もしそれが同じであれば、「祖師の家風ではない」というもの、すなわち「教外別伝」という立場になろうか（参照―鏡島元隆『道元禅師とその門流』所収論文「道元禅師と宋朝禅」13、14頁）。これに対し、如浄禅師は、「妄談」として激しく斥けているのである。

この「教外別伝」の主張者の一人として晦巖大光が挙げられ、その法系を虎丘紹隆―応庵曇華―笑庵了悟と承けるとする論文（石井修道『宋代禅宗史の研究』第四章「宏智正覚と黙照禅の確立」註、400頁）がある。そうであれば、

臨済宗虎丘派下に属し、前掲の東谷妙光とは全く別人ということになる。要するに拙稿は、同人説と別人説とを併記する立場であることを再度、お断りしておきたい。

育王寺の「寺志」史料『明州阿育王山統志』卷十六「先覚攷補遺」には、「第三十二代晦巖光禅師」と「第四十一代東谷光禅師」とが併記され、同じく『扶桑五山記』にも世代数が「卅一、晦岩光禅師^{（大光）}」「卅九、東谷光禅師^{（妙光）}」とあって異なり改名がなければ全く別人であることを示唆しているように思われる。

しかるに『天童寺統志』卷上「先覚」中の「附訂正宋元諸祖代次記」には、前述の通り「晦巖」と「東谷」とを混同したまゝ、「決疑」の項に「但補席時代、無拠為証、大約由育王而来、在理宗紹定年間、謹列於此」とあって、育王寺より天童寺へ移遷したとし、その時期を紹定年間（一二二八―二三三）とするのである。「東谷」はともかく、「晦巖」が如浄・枯禅の両師の後に天童寺へ止住した時期を想定すれば、ほぼ妥当な説といえる。

晦巖が天童寺に在住していた時期に虚舟普度（一一九九―一二八〇）の参訪に依じていることが、虚舟の「行状」

(『虚舟普度禅师語録』末尾所収) 文中に見える。それは、虚舟が本師の無得覚通の下で証契後、数年してその所得を以て当時の禅匠三人、すなわち「天童晦巖光」「大慈石巖璉」「虎丘石室迪」に質したというものである。残念ながら問答応酬の内容は不明であるが、その時期は叙述の上から淳祐元年(一二四一)以前である。「晦巖」のその後の動静を示す史料は、今のところ不明である。

「東谷」に関する史料は、育王寺の後に天童寺の在住を記載することなく「特旨移靈隠」と続く。『扶桑五山記』一の「靈隠住持位次」には、「卅八 東谷光^(妙光)禪師」と所載している。また『武林靈隠寺志』卷三の「住持禅祖二」にも「東谷光禪師」の項があり、靈隠寺に住したことは確実である。問題は、この『寺志』に「東谷光禪師嗣明極祚天童密孫也」と記載されている「天童密孫也」の箇所である。東谷は、宏智正覚―自得慧暉―明極慧祚と承ける曹洞宗宏智派下の人である。東谷の靈隠寺在住以前、天童寺住職で諱が「密」字の人は見当たらない。「孫」字に注目し、時代を設定すれば、密庵咸傑が想定できる。密庵の法孫であれば、「晦巖大光」ということになる。つまり、この記事は、

天童寺世代考(四)(吉田)

「東谷妙光」と「晦巖大光」とを混同しているとも解釈できるのである。

『増集続伝灯録』卷六の東谷妙光伝には、育王寺より靈隠寺へ移遷した後の記事としてある僧との「五位」に関する問答、「上堂」語二偈、「歳夜小参」一偈と続き、示寂時の様子を記し終っている。

東谷は、宝祐元年(一二五三)十二月五日に示寂している。その遺偈は「東谷に片雲収め、月円かにして古渡に当る。寒に驚き白鳥飛び、夜に無影樹に宿す」(原漢文)とある。

晦巖の示寂年は不明であるが、『明州阿育王山統志』卷六「先覚攷補遺」中に「第三十二代晦巖光禪師^{八月十日}二月^{十日}」とある通り、その示寂日は八月十二日であることが知られる。従って東谷の十二月五日とは相違するのである。晦巖の舍利塔は、『天童寺志』卷七「塔像攷」によれば、太白嶺の「中峰之麓」にあることを記している。なお、その中峰には、晦巖の師翁である密庵咸傑の塔がある。『統志』の山川図には、中峰庵の後方に「密庵祖塔」が描かれている。

○東谷史料

- (1) 『枯崖漫録』〔統藏(旧)二一乙二二一、(新)卷一四八〕の卷中(八四a)には、明極慧祚の法嗣として法兄弟の間柄にある短篷遠禪師と「洞上の宗」を振起したことを記し、巻下(九〇a、b)に道交の士であった実齋蔣公と詠った「西庵三偈」を集録している。
- (2) 『続伝灯録』卷三二〔正藏五一、六七九a〕の目録に「華藏祚禪師法嗣一人」として「東谷光禪師」の名だけ所載する。
- (3) 『増集続伝灯録』卷六〔統藏一四二、四五五c、d〕に「大鑑下第十七世、華藏明極祚禪師法嗣」として「杭州靈隱東谷光禪師」の伝記がある。出身地、住職地を挙げ、ある僧との問答や上堂語、歳夜小参語を掲げ、末尾に示寂年月と遺偈を所載する。比較的まとまった伝記であるが、天童寺に住した記載はない。
- (4) 『五灯会元統略』卷一〔統藏一三八、四二六d〕に華藏祚禪師法嗣として「東谷光禪師」の上堂語(一偈)が所載する。
- (5) 『継統録』卷一〔統藏一四七、三五七c〕に華藏祚禪師法嗣として所載するが、祚禪師法嗣の下に割注「師嗣淨慈暉會元無レ出今収入補灯」との文が続ぎ、東谷の本師明極の嗣承を示し、前掲(4)の上堂語と頌(二題)が挙げられている。
- (6) 『続灯存稿』卷一〔統藏一四五、一二六a、b〕は、前掲(4)と同文。
- (7) 『続指月録』卷一〔統藏一四三、四〇三a〕に曹洞宗の項として如淨禪師の後に「東谷光禪師」がある。前掲(5)の文に多少、手を加えた程度で大差はない。
- (8) 『寺志』卷三〔二一六〕に「晦巖光禪師」(集略)として「師諱仏光晚号東谷嗣華藏祚」云々の文がある。なお前掲(4)の「上堂語」が「住天堂上堂」とあり、天童寺入院の際に唱道されたものになっている。末尾に晦巖の「舍利塔」が中峰下の別山禪師塔の左にあることを記す。
- (9) 『統志』卷上〔十七〕には、『増集続伝灯録』の記事(上堂語等を除く)を所載し、『虚舟度禪師行状』中の文を引く。その後一段下げ「決疑」として論及している。それによれば『増集続伝灯録』には、晦巖が天童寺に住した記載はないが、『虚舟行状』に所載する(「天童晦巖光」)ので繕うことができるとし、大育王寺より入山したものと考え、理宗の紹定年間(一二二八、一二三三)に住したと推定している。
- (10) 『武林靈隱寺志』卷三〔「中国仏寺志」第一輯第23冊、明文書局印行・台湾〕「住持禪祖二」に「東谷光禪師」の項がある。ただし「臨濟宗嗣明極祚天童密孫也」と誤った法系を記

している。東谷の本師明極は、曹洞宗宏智派の人である。「天童密」は不明であるが、密庵咸傑であれば、その嗣承は笑庵了悟の法嗣「晦巖大光」となり、臨濟宗虎丘派の人となる訳である。従って「明極祚」の法嗣という事象の上から記せば「曹洞宗嗣明極祚自得暉孫也」となるであろう。しかし、この『寺志』の撰者は、「東谷光」と「晦巖光」を同人と見做す考えを持ち混同していると判定できる。

(11) 『増修雲林寺志』卷三〔同右、第一輯第24冊、同右〕「法語」に「東谷光禪師」の項があり、前掲(4)と同じ「上堂」語が所載する。

(12) 『明州阿育王山統志』卷一六〔同右、第一輯第12冊、同右〕「先覺攷補遺」の世代一覽表の中に「第三十二代晦巖光禪師八月十日」と「第四十一代東谷光禪師嗣華藏祚公」とがあり、「晦巖光」と「東谷光」とを別出している。なお『扶桑五山記』(玉村竹二校訂、臨川書店刊)所収の卷一「育王住持位次」には「卅一晦岩光(大光)禪師」と「卅九東谷光(妙光)禪師」とがあり、前掲の『統志』と世代数が各々相異なる。もし同人とすれば再住となるが、同寺内で名を別にして所載する例を知らない。

(13) 『虚舟普度禪師語録』末尾「行状」の文中「師(虚舟)曲躬天童寺世代考四(吉田)

作礼曰、謝和尚証明。(中略)歴試之居数年辞通、以所得、質当世、天童晦巖光、大慈石巖璉、虎丘石室迪、一見器異、為不可及、因留典法務于三師間、淳祐初、制府趙信菴、以達康半山、敦請出世」〔統藏一三三、九四a〕と見えている。なお、この虚舟の「行状」には、癡絶との道交も記されている。

松巖 印

松巖の史実は、ほとんど不明である。伝記もなく、嗣承関係も判らない。

『扶桑五山記』一の「天童住持次位」(マテ)には「卅四 松岩印禪師」と記載されているが、『寺志』と『統志』には何の記載もない。

北磻和尚敬叟居簡(一一六四-一二四六)の『北磻集』(『欽定四庫全書』所収)卷九に「印老住天童州府山門諸山三疏」がある。松巖と敬叟との関係も不明であり、松巖の「三疏」が『北磻集』に所収されている事情も判らない。敬叟は仏照禪師拙庵徳光の法嗣であり、法兄弟に海門師齊・浙翁如琰・無際了派等の他に空叟宗印と鉄牛心印と諱

に「印」字のつく二人がいることに注目したい。空叟は育王寺、鉄牛は靈隱寺に各々住している。この二人が、天童寺に住した記録はないが、松巖が同じ法兄弟であったことも推定できるのである。次に『北磻集』所収の松巖の「三疏」を挙げてみよう。

(1) 「州府疏」

有法付国王大臣、金湯惟固無法付空、王真子衣鉢親伝、斯文欲並皇明王度敢忘陰翊某人身藏北斗、口吸西江勝公三代後、跨竈衝樓肯堂一着先摩項放踵康莊失步指陳、自巳珍奇死水觀瀾、又属他家風月与其輦轂曷若山林指碧巖石玲瓏達四聰于丹辰、觀黃河水清淺、導万派於銀潢

(2) 「諸山疏」

会仏法人、何啻稻麻竹葦、無陰陽地、不関水旱豊凶、幾箇知婦其誰踏著、某人浮華消尽真夷独存、一点無私十年起廢春去、桃花片片緑繞庭除夜開、月觀沈沈翠磨星漢、孰謂平常是道、安知坐死平常、自憐計較俱非、不解巧生計較、出乎其類少慰、同盟豈無它人、願觀盛作。

(3) 「山門疏」

名徹三前朝一得松巖之奎画道參、中貴服稻畛之金欄、道人

分上安用多般、明眼人前不直一笑。某人勅住天竺勅歸天童、静退于演遁菴。機尤峭峻遭逢、如清道者籠更光華樞谷成陰陸州担板、仏燈珣後仏燈印、又聯芳事法界中事法門当再振。

右の「三疏」中、「山門疏」に「某人勅住天竺、勅歸天童、静退手演遁庵」の句があることに注目したい。某人が松巖自身とすれば天童寺に住する前に天竺寺（杭州上天竺講寺）に住していたと推定できる。そこで『杭州上天竺講寺志』卷三「尊宿住持品」の「歴代住持題名碑」を見ると「二十六代東林祖印法師、景定三年」とある。この「東林祖印」が「松巖□印」であるかどうかは何の確証もない。ただ、その「東林祖印」が、景定三年（一二六三）の後半期に上天竺寺へ住していることが知られる。この「東林」の嗣承関係も不明であるため、両者が同人であるか別人であるとも言及できない。

○松巖史料

- (1) 『扶桑五山記』一「天童住持次位」
- (2) 『北磻集』卷九「印老住天童州府山門諸山三疏」

雲臥 榮

雲臥の伝記も不明である。『扶桑五山記』一の「天童住持次位」には、「卅五 雲臥榮禪師」とある。『寺志』『続志』に雲臥の記載は何もない。

「雲臥」の名は、道号か、山号（庵号）か判らない。しかし、すぐ仲温暁瑩（一一二七～六二）の『雲臥紀譚』の書名を想起できる。仲温が、江西省南昌府豊城県感山の「雲臥庵」において撰述した紀譚警語集である。「雲臥榮」がこの「雲臥庵」に係しているかどうかは不明である。因みに仲温は、大慧宗杲の法嗣で、この時代より約一世紀前の人物であり、「雲臥暁瑩」とも称したことがある。

○雲臥史料

(1) 『扶桑五山記』一「天童住持次位」

癡絶道冲（一一六九～一二五〇）

癡絶の伝記「徑山癡絶禪師行状」は、寂後二年にあたる淳祐二年（一二五二）六月、朝散郎趙若琚（孺翁）によつ

天童寺世代考四（吉田）

て撰述されたということもあり、以後、諸伝記と基本となつてゐる。拙稿もこれによつて叙述してみよう。

出自は「武信長江荀氏子」とある。「武信長江」とは、地名なのか、人名「荀氏」に掛かる諡号なのか、よく判らない。もし地名として「武信」が「武進」の誤りだとすれば、江蘇省南部、宋代に兩浙路常州の治所であつた辺りにならうか。諡号とすれば、『五代史』六十九や『旧五代史』百三十二に所載する高季興（五代、南平王）の子孫ないし縁者に当るのか。いずれか全く不明である。あるいは、別の意味内容を有しているかも知れない。

母（郭氏）が、嘗て木瓜の樹下をそぞろ歩きして、その実、纍々とあるのを見、それを取つて食べる夢を見た。占師の云うには、まもなく「奇士（すぐれた人物）」を産むと。そして彼が生まれたのである。「豊上短下（額が広く肥え、下方が短い）」の容貌をし、天性は人並みすぐれていた、という。この種の叙述は、偉人聖人の伝記につきものである。

長じて「進士」を目指したが利あらず、梓州（四川省潼川府）の妙音院にて仏教を学び儀礼を修め落髮を礼拝した。

成都へ遊学し、大聖慈寺で経論を習っている。いくばくもなく名相によって人を厭うようになり、その志は出世間法(出家)に傾倒していった。

紹熙三年(一一九二)、四川省の深い溪谷を出て、荆楚(湖北省湖南省)を回旋した。時に松源崇嶽が、密庵の道風を江西省饒州の薦福院で振っているのを聞き、その爐鞴に投じた。適たま饑饉の年に値う。曹源道生(松源と法兄弟)が雲居山(江西省南康府建昌県か)の首座となつてゐることを松源から西湖(浙江省杭州)の辺で聞いた。恐らく癡絶はこの時、雲居山の松源の下へ行つたものである。そして曹源が妙果寺(江西省饒州)に請を受け出世した際も随侍して、「入門(山門と同じか)語」を聴き、癡絶は少しく悟省を得たという。参堂し「侍香」に任ぜられてゐる。紹熙五年(一一九四)夏、曹源が亀峰寺(江西省信州)へ転住した際も随侍し、三年間滞留した後、辞去してゐる。なお、癡絶は、『曹源道生禪師語録(内題「曹源和尚住饒州妙果禪寺語録」)』を編録してゐて(統蔵二二一所収)、妙果寺と亀峰寺における曹源の「上堂」語や「讚頌」等を収めている。

癡絶が亀峰寺を下山する頃、すなわち慶元三年(一一九七)、松源が靈隱寺(浙江省杭州)に入院してゐる。松源は、癡絶の受業師であり因縁浅からぬ関係にある。そこで癡絶は、靈隱寺に参訪したのであるが、松源の門風は高俊で妄りに許可せず、仮宿で八ヶ月間過ごしたが、遂に帰堂することができなかった。そこで囁嚅を重ね、自分の志を表明できず苛立つ思いでいた。ある日、癡絶の志を松源にとりもつてくれる者がいた。松源の「我、八字に打開し、他を挂搭せしむ。自はこれ他、当面に蹉過す」との語を聞き、口耳とも喪す思ひになり恥入つた、という。そして曹源の下、妙果寺・亀峰寺において随侍してゐた時の嬉笑怒罵は、まさしく善巧方便に他ならなかつたことを知り、これによって天下の老和尚の舌頭を疑わなくなった。しかし、既に曹源は示寂してゐた。癡絶は、曹源の法嗣たることを自覚したが、曹源の生前中に印可を授けられなかつた、ということになる。

その後、遍歴すること二十年余、浄慈寺(浙江省杭州)の肯堂彦充(不詳)や華蔵寺(江蘇省常州)の遯庵宗演(不詳)を参訪したところ、二人は一見して癡絶の法器た

ることを認め、また密庵の系統に連なっていることも知り、必ず復興しようといった。肯堂と遯庵は癡絶の参学師である。さらに、その後、潜庵慧光（不詳。密庵咸傑の法嗣）・一翁慶如（不詳。同上）・癡鈍智顛（不詳。焦山師体の法嗣）・掩室善開（不詳。松源崇岳の法嗣）・浙翁如琰（一一五一―一二二五。拙庵徳光の法嗣）と道交を結んでいる。

嘉定十二年（一二一九）、当時、徑山において修行中の身であったが、請を受け、同年五月二十日、浙江省嘉興府の報恩光孝禅寺に入院、そこで曹源に師承香を焚いている。宝慶元年（一二二五）、江蘇省建康府蔣山の太平興国禅寺へ移り住した。この地で十四年間、在住したと見え、多くの官吏の知遇を得ている。

嘉熙二年（一二三八）、閩師東（不詳）などとの縁があつたのか不明であるが、福建省福州府の雪峰山崇聖禅寺に入院している。雪峰義存（八二二―九〇〇）の開山地であり、十刹の第七位である。この寺の在住は、半年で終わっている。

嘉熙三年（一二三九）十月三日、勅旨を受け、太白名山天童景德禅寺に入院している。適たま阿育王山広利禅寺の

天童寺世代考四（吉田）

住持も空席であつたので兼領し、両山の間を往来した、という。

『語録』に「権育王上堂」語が所載する。「天童用底、来_レ育王用不_レ著。育王用底、帰_二天童用不_レ著。雖_二然如_レ是、用不_レ著用有_レ余、一箭雙鷗墮_二手落_一」と。四方の学人が雲集し市をなすようであつた、という。その声誉が上がり詔勅によつて、臨安府の景德靈隠禅寺へ移遷している。

淳祐四年（一二四四）七月十四日、靈隠寺入院、約一年間在住した後、退院し金陵へ趙若琚を訪ねている。朝散郎の趙は『行状』の撰述者である。趙は、癡絶の曾ての止住地蔣山への隠棲を勧めたが、拒否された。そこで趙のはからいもあり、朝命によつて杭州の虎丘山に老を養つていた。時に癡絶、七十六歳である。その後、淳祐八年（一二四八）春、育王寺の住持が空席になり、癡絶を推挙しようとして叢林の尊宿が企つたが、結局、固辞している。翌年二月、浙江省平江府（呉興）の覚城山法華禅寺の開山に推挽され、再三の懇請もあつて止むを得ず受けている。それも束の間、半年で法華寺を退隠することになった。

淳祐九年（一二四九）八月、詔勅があつて浙江省臨安府

の径山興聖万寿禅寺の継席を命ぜられ、十月二十九日に入院している。前住は無準師範(一一七八―一二四九)であった。無準は同年三月十八日に示寂しているが、癡絶は彼の塔所において、自分は「十五日」に行くと言っている。その如く、翌年五月十四日夜分に示寂した。三日後に茶毘に付すと舍利は五色に燦然と光ったという。弟子達は、靈骨を奉じ、五月十九日に金陵の玉山庵に帰葬し、その半分を径山菖蒲田玉芝庵に建塔した。世寿八十二、僧臘六十一。

癡絶の道友は、『行状』に所載する前掲の人々の他にも数人が知られている。『無文道燦禅师語録』と『枯崖和尚漫録』には、撰述者の無文道燦(一一二七―一二二七)と枯崖円悟(一一二六―一二六三)をはじめ、如浄(一一六二―一二二七)、無準師範(一一七八―一二四九)、さらに西山亮(不詳)、伽堂善济(不詳)、晦巖暉(不詳)などの僧名が見える。また北磻(簡翁)居敬(一一六四―一二四六)も『北磻集』により道友の一人として数えられる。

癡絶の法嗣や門人としては、彼の『語録』に所載する僧名によって、その大半を知り得る。上下二巻の『語録』中、卷上は、「侍者智沂」と「嗣法門人悟開」の編録であり、

卷下は、「嗣法門人(頑極)行弥・紹甄」と「嗣法門人(月潭)智円・元省・元枢」の編録となっている。智沂を除く他の六人が法嗣ということになるが、該書に所載していない者もいる可能性がある。

同書卷下には、癡絶が多数の学人に示した「法語」が所載する。僧名の下に役職分限を付し、さらにその中、後日に昇住したと推定できる寺院名も記してある。以下は、便宜的に役職毎にその僧名を列記することにした。

首座―巖寿・悟開・覚照・宗雅・大方・法印

長老―本覚

知客―法嗣・正受・師智

侍者―了徽・土杰・祖印・祖徽・智光・徳室・以南

蔵主―晞勤・恵照・了心・祖聡・恵济・宗亮・祖慶・若

敬

維那―紹明・巽升・祖伝・宝伝・至明

書記―宗定・道如・徳琛

浄頭―繼能

禅人―従聞・覚崇・定仁・思遠・海印・紹隆・本然・智

永

上人―聞解

冒頭の「首座」と「長老」は、一般に同義的に使われるが別記した。末尾の「禪人」と「上人」は、門下の学人ではなく、恐らく一時的に外来した学人であろう。

なお、道友の一人、無文の語録『無文印』卷八所収「送源靈叟歸蜀序」の文中に癡絶下の四君子（明秀・膚敏者）として、沂良巖・遷廉谷・定勝叟・遠無外の四人を挙げている。この中、無外義遠は、如浄の法嗣であり、道元禅師の法弟である。

また右の列記中、「道如書記」も癡絶に与えられた「法語」に記されている通り、如浄の門下であり、道元禅師と天童寺で共に修行に励んだ仲である。『随聞記』卷六に「往日天童山ノ書記道如上座ト云シ人ハ、官人宰相ノ子ナリシカドモ」とある人物であり、「学道は貧なるべし」の典型（「衣服ノヤツレ破壊シタル」として登場する。当時、学人は参訪し数人の良師に随侍していた訳であり、右の無外義遠と道如はその一例を示している。

○癡絶史料

天童寺世代考四（吉田）

(1) 『癡絶道冲禅師語録』（統蔵一二二、二四六c、二八五b）

が主要史料。卷下末に「径山癡絶禅師行状」が所載する。その「行状」は、癡絶の示寂二年後の淳祐十二年（一二五二）六月一日、朝散郎の趙若琚（孺翁）によって撰述された。

『語録』の編録は、侍者智沂等に拠る。卷上には、入寺七ヶ寺の「七会語録」や「普説」「法語」「讚偈頌」を収集。卷下の前半部に「普説」「示学人法語」等がある。

(2) 『釈氏稽古略』卷四（統蔵一三三、九〇d）に「癡絶禅師」伝が所載する。出自と出家、機縁と昇住寺院、示寂などを略述している。

(3) 『続伝灯録』卷三六（正蔵五一、七一a、b）に「大鑑下第二十世、薦福道生禅師法嗣、径山癡絶禅師」伝がある。(1)を参照していると思われる。

(4) 『増集続伝灯録』卷三（統蔵一四二、三九四d、五c）には、「亀峰曹源生禅師法嗣」として「径山癡絶道冲禅師」伝がある。(3)の記載順で多少手を加えている。

(5) 『補続高僧伝』卷一一（統蔵一三四、一〇三c、四b）に「癡絶冲伝」がある。冒頭に聖人伝特有の出生奇譚を所載するが、叙述は前掲書を踏襲し、末尾に「真法門の梁棟、後学の標準」と推称している。

天童寺世代考(四)(吉田)

- (6) 『南宋元明禪林僧宝伝』卷七〔統蔵一三七、三四三b、四a〕に「径山冲禅師」伝があり、末尾に撰者自融の「贊」に癡絶の人徳を「不二心」の語で賛えている。
- (7) 『五灯会元統略』卷五〔統蔵一三八、四七四b、d〕に「薦福生禅師法嗣」として「臨安府径山癡絶道冲禅師」伝が所載し、前半に略伝、後半に「上堂」語を掲げている。
- (8) 『繼灯録』卷二〔統蔵一四七、三七三d、四b〕に「薦福生禅師法嗣」として「臨安府径山痴絶道冲禅師」伝がある。前掲の(7)の本文を大半踏襲している。「上堂」語の一部と後半部の叙述に多少の出入と増減がある。
- (9) 『五灯巖統』卷二〔統蔵一三九、四六八c、d〕に「薦福生禅師法嗣」として「臨安府径山癡絶道冲禅師」伝が所載する。前掲の諸伝記に較べて短文であるが、簡潔にまとめている。
- (10) 『統灯存稿』卷三〔統蔵一四五、三四b、三五a〕に「薦福生禅師法嗣」として「抗州径山癡絶道冲禅師」伝が所載する。前掲の(7)(8)に構成と内容が相似する。
- (11) 『統指月録』卷四〔統蔵一四三、四二〇a、b〕に「臨安径山癡絶道冲禅師」伝が所載する。(10)を多少、短縮している。
- (12) 『統灯正統』卷二〇〔統蔵一四四、三六五b、六a〕に「薦福生禅師法嗣」として「抗州府径山癡絶道冲禅師」伝が所載、前掲の(7)(8)と相似する。
- (13) 『五灯全書』卷四八〔統蔵一四一、四五d、六b〕に「薦福生禅師法嗣」として「臨安府径山癡絶道冲禅師」伝が所載、内容や文量の上で前掲の(10)(12)に近い。
- (14) 『北磻居簡禅師語録』〔統蔵二二二(『禅宗集成』15)、八一b、c〕に「為癡絶和尚贊初祖達磨并馬大師画像」と「為癡絶和尚贊三睡」とが所載する。癡絶と北磻(一一六四、一二四六)との道交を示す史料である。従って『北磻文集』や『北磻外集』にも所載の可能性がある。
- (15) 『無文道燦禅師語録』〔統蔵一五〇(『禅宗集成』25)、五一一d〕に「跋_下無準癡絶北磻送_二演上人_一法語」と同上〔五一二a〕に「跋_二癡絶和尚墨跡_一」とが所載する。癡絶と無文、さらに無準や北磻との相互的道交関係が知られる。同書には、「南庵主起棺」〔五〇八d、九a〕や「跋_二天童浄和尚寿無量墨跡_一」〔五一〇d〕があり、同じく如浄とも道交があった。
- 『無文印』卷一九「書劄」に「霑無_二扞_一」が所載す(佐藤秀孝「如浄会下の人々―嗣法参学門人の追補1」宗学研究 号)。
- (16) 『枯崖和尚漫録』にも撰述者の枯崖と癡絶との道交を示す文が散見する。同書の巻中〔統蔵一四八、八二d、三a〕には西山 亮(華蔵宗演の法嗣)、同中〔八六c〕には尙堂善濟

(天童達觀の法嗣。同書に「平江府虎丘坵堂濟禪師」とある)、
同下〔八七dと八a〕には晦崑暉(師承不明)、同下〔九
三cとd〕には別翁甄(癡絶の法嗣)との機縁、卷下〔九一
a〕には癡絶と尚書陳公韡との交渉が記されている。

(17)『寺志』卷三の「先覚考」〔二一九と二二二〕に「癡絶沖禪
師」伝、卷六「法要考」〔四三五と四四〇〕に「上堂」語や
「問答」「法語」等、卷七「塔像考」〔四九七と五〇〇〕に
「塔」を金陵山に帰葬したこと、(1)の趙若据撰「行状」の要
文、石室輝(無準師範の法嗣)の「祭文」、卷八「表貽考」

〔五六五と六〕に木石居士尤諳(不詳)の「癡絶禪師語録序」、
同右〔五七〇〕に笑隱大訴(仰山元照の法嗣)の「癡絶禪師
書山谷煎茶賦後跋」、同右〔五七二〕に「癡絶翁所賡白雲端
祖山居偈忠藏主求和詩」、同右〔五七三〕に元叟行端(徑山
善珍の法嗣)の「癡絶所書草堂法師示道璋書授其徒惠派跋」、
同右〔五七四〕に千巖元長(天目明本の法嗣)の「癡絶和尚
答啓霞書跋」、同右〔五七七〕に用彰俊(不詳)の「癡絶和
尚室中拈如何是仏荆叟下語云爛東瓜頌」が所載する。